神戸大学　大学教育推進機構　大学教育研究
第 18 号（2009 年度）　2009 年 9 月 30 日発行：57－62

若者にとってキャリアとは何か（その４）
－社会的スキルと携帯電話の関係を中心に－

山内　乾史

若者にとってキャリアとは何か（その４）
―社会的スキルと携帯電話の関係を中心に―

山内乾史（神戸大学　大学教育推進機構）

私は昔話にふけるほど年を取っているわけではない。ただ、われわれはいわゆる「携帯電話ネイティブ」ではない。それどころか 30 代半ばに入ってから持つようになった。すっかり携帯電話が普及し定着した後に、おそるおそる、あるいは渋々手にした、完全な「携帯電話ニューカマー」である。ところが今の大学生には小中学生の頃から持っていたという者が多いようである。そこで、ここでは、個人的な経験をもとにした世代間比較を通して議論したいと考える。

携帯電話ネイティブでない者の中には、「携帯電話は基本的に電話だ」という誤った認識を持った方が非常に多いように感じる。しかし携帯電話は電話ではあるが、単なる電話ではない。むしろ諸機能のうちのごく一つが通話機能というにすぎない。電話よりもむしろ、メールやインターネットなどの道具として使用するというのが若者の感覚であろう。

ところで、電話はもちろん、話し言葉で話し相手に話しかけるものであろうが、メールは書き言葉で送信相手に意思や用件を伝えるものである。インターネットのブログなどになると、書き言葉で特定多数ないしは不特定多数に感想や意見などを伝えるものである。これら三機能の間で、その影響力の範囲は格段に異なる。

私が高校生くらいの頃は遠方の友人と長く通話すると、親が気にしたものである。電話は一家に一台が基本で、たいがい居間にあったから、親兄弟の前でしゃべらざるを得ないし、長々としゃべるための道具ではなかった。また人目を気にしながら話す以上、話題も自ずと限定された。通話面だけとっても携帯電話は、これとは格段に状況が異なる。相手にその気があるなら、いつでもどこでも誰とでも通信できるというのが携帯電話であり、たとえ海外にいても（所定の料金さえ払えるなら）何の苦もなく通話できる。加納寛子氏が近著『即レス症候群の子どもたち―ケータイ・ネット指導の進め方―』（日本標準、2009 年）で書いている通り、若者の間で、防水機能付きの携帯電話がはやっているということである。なぜなら入浴中も携帯電話を手放さないからである。昔の黒電話は家族全員のものであった。また、重くてコード付きでしたから、個室や、ましてトイレや風呂に持ち込むなどあり得なかった。現在は、TPO を全くわきまえず、話したいだけ話す者が少ないないということのようである。電車の中でも他者がいないかのように、

プライベートな話題を大声でしゃべっている若者に出くわすとただただ辟易する。

また、加納氏の著書にも描かれているが、一年 365 日、24 時間携帯電話を手放せない、モバイル中毒の若者が少なくない。ベッドの中でも入浴中でも食事中でも授業中でも、ずっといじっている者がいる。しかも、5 分ルールだの、15 分ルールだの、メールにはすぐ返信を書かねばならない。書かねば絶交されるとあっては、もはや、強迫観念の世界である。加納氏の言う即レス中毒である。

ただ、こういう問題は小中学生、高校生だけの問題ではなく、大学生や大人も、つまり年齢に関係なく多くの方が関わっているとも言える。実は私の勤務先のある部局で実に陰湿なネットイジメがあった。大学院生がやっていたというから驚きというほかない。というより関係者のはしくれの一人として恥じ入るばかりである。イジメの標的にされた当人は退学を余儀なくされてしまった。ネットを開いてみると、実名攻撃＆集中砲火で、読むのもおぞましい罵詈雑言が連ねてあった。ただこのケースなどは、単なるネットによるイジメというのではなく、いわゆる「集団ストーカー」にも似た状況だったようである。つまり、ネットによるイジメだけではなく、教室現場でのリアルなイジメと、ネットでのバーチャルなイジメとが結びついて、おそらく標的の当人は気の休まる時がなかったことと思う。

思えば、1980 年代からイジメは社会問題化してきたわけであるが、イジメと一言に言っても、裏サイト登場以前と登場以後のイジメはずいぶん違う。ネットイジメが顕在化する以前は、いじめている人間が、少なくともクラスの誰かとか、あるいは特定できるとか顔の見える範囲内にいた。そしてイジメと言っても 365 日 24 時間続くわけではなく、自宅に帰ればひとまずイジメからは解放されたわけである。特に高校になり、通学距離・時間が長くなり、自宅が散在するようになると、帰宅後や休日は物理的に距離ができ、少しの間一人になれたわけである。誤解のないように念を押して言っておくが、「だから良かった」と言っているわけではない。

ところがネットイジメはけっして当人を解放してくれない。家に帰ってほっと一息つき、携帯電話のサイトを開くと自分の悪口がどんどん書き込まれている。変なメールが送り込まれてくる。休まらないというわけだ。イジメがずっと続いているわけだ。夜も休日も･･･。そして学校へ行くといつものリアルなイジメが再び続く･･･。これはまさしく生き地獄である。ネットイジメと教室現場でのイジメが結びついて、加速度的に当人を追い詰めていくことになるのであろう。

もちろん、携帯電話の問題はイジメにとどまらない。さまざまな若者に関わる問題を引き起こす、あるいは火に油を注ぐようなトゥールとなっている。たとえば、アダルトムービーを満載したサイトがいろいろとある。その題だけを見ていても、普段ネットを

あまり使用しない大人たちは仰天するであろう。そのアダルトムービーに高校生が登場するのは当たり前、中学生、小学生や幼女まで登場して、援助交際だの、レイプだの、アブノーマルな性交だの、なんでもありというわけである。援助交際の中学生（大抵はJC とか中●生とかとぼかしているようである）が云々と銘打って出てくるものも多く、もしやらせでなく本当にそうであるなら、児童ポルノ法はじめ関連諸法に抵触するのは間違いないであろう。そういった動画はプロバイダーなどによって自主的に削除されているが、その一方で、それ以上にどんどん投稿され、一掃されることは決してない。そして四六時中携帯電話をいじっている子どもたちはその動画をみたり、また触発されて自分のものを撮影して投稿したりするということであれば、携帯電話は実に危険な道具になり得るのである。

私の子どもをみていても、携帯電話というのは、小中学生にとっては「おもちゃ」のようなもので、友達との通信、ゲーム、サイト検索、電卓、電子辞書、ナビ、アラーム、カメラなど多様なものがコンパクトに収められた、まさしくオール・イン・ワンの手軽な便利なものである。一人になったときの暇つぶしには、携帯電話一台あれば、ことたりる。しかし、多くの相手とのコミュニケーションに参加したいときにも携帯電話は大いに活躍する。そしてその多くの相手というのは、不特定多数ということでもあり、望ましくない相手も当然含まれている。知らずにそういう人たちとコミュニケーションを取り、ずるずるとんでもない道に引きずり込まれるケースも少なくないようである。

また、門倉貴史氏の『セックス格差社会―「恋愛貧者」「結婚難民」はなぜ増えるのか―』（2008 年、宝島社）によれば、小学校高学年から中学生までのジュニアアイドルの動画（児童ポルノすれすれのものもある）配信などにも携帯電話は大きな役割を果たしているようである。ジュニアアイドルに限らず、チャイドル、ホモドルなど様々な分野でも携帯電話は小道具として、一役買っているというわけである。もちろん、一般の PC からのアクセスも多いのであろうが、やはり子どもたちが携帯電話をもつことによって生じている面が大きいのではないのだろうか。

子どもたちだけでなく、たとえば薬物の売買、AV（男子学生のホモビデオへの出演）への出演など、関西を中心に大学生の不祥事が相次ぐこの頃であるが、携帯電話がやはりその通信道具として大きな役割を演じている。ごく一部の人だけが関わる特殊な世界が、誰にでもアクセス可能な世界に変わったというわけである。また京都教育大学で先年大きな問題が生じたときも、事件後のブログの書き込みを巡ってさらに問題が大きくなったことは周知の通りである。

ところで、冒頭で述べたことと少し矛盾する面はあるが、このように多機能的な携帯電話も、やはりメールにせよ、ネットにせよ、電話にせよ、他者とのコミュニケーショ

ンの道具としての側面が大きいことは否めない。四六時中携帯電話をはなせず、ガチガチいじっている若者たちはある意味孤独で絶えず、他者につながって何かやりとりをしていないと不安なのであろう。

ただ、ネットでつながる人々を「疑似コミュニティ」と称する人がいるが、私の基本的コンセプトでは、コミュニティとは、ただ単に人と人とが無機的な文字で書かれたメールのやりとりをすると行ったようなものではない。リスペクトとシンパシー、この二つを欠いた世界はコミュニティではないと考える。携帯電話のコミュニケーション機能で作られる「疑似コミュニティ」なるものには年長の者、目上の者への敬意を欠き、また他方弱者をはじめとする他者への攻撃も頻繁にみられ、どうもリスペクトやシンパシーに欠けた世界のようである。良識を持って振る舞っている人々ももちろん多いけれども、対面のコミュニケーションと比べて、直接的に、しかも増幅された形で喜怒哀楽を伝えてしまうということになりがちである。平凡なメッセージでは、山のようなメッセージに埋もれてしまうということもあるのだろうが、このような「疑似コミュニティ」に特有のコミュニケーション問題ではないかと考える。というのは下記の通りである。

社会的スキルや近年はやりの「学士力」という概念との関係で見ると、携帯電話ネイティブ゛の世代は、社会的距離の取り方をよくわかっていないという指摘がよく見られる。親兄弟や親友、恋人のようにごく近くまで心身ともに接近できる相手と、単なる知り合い、顔見知り、取引先の相手など、ごく限られた領域のコミュニケーションしか取る必要がなく、心身ともに接近することを必要としない相手とがいる。私自身社会的距離の取り方があまりにも下手なので、偉そうには言えないが、子どもの頃、何よりも学ぶべきことは社会的距離の取り方、はかり方ではないかと考える。そして.社会的距離に応じた言葉遣い、礼儀作法などがあるはずであり、相手との距離の取り方を考えて、それに応じた言葉遣い、礼儀作法をとることができる能力は、現代社会では非常に重要な能力の一つであろう。よく言われる対人関係能力、コミュニケーション能力も、この社会的距離をいかに的確に測れるかによるわけである。

われわれ携帯電話ネイティブでない世代には、小さい頃から兄弟や友達に揉まれて、社会的距離の取り方を学んだものであるが、今の携帯電話ネイティブ世代は等身大の生身の人間と接するだけでなく、携帯電話で「いつでも連絡を取ることができる」関係を結び、またなかなか普段は話をすることのできない偉い人たち、有名人に気軽にメールを送ることもできてしまう。また偉い人たちや有名人のブログへの書き込みをすることには特別な努力はいらない。手紙の時の言葉遣い、電話の時の言葉遣い、こういうことについても私自身、親から「〇〇という言葉は失礼」、「××という表現を使いなさい」と細かく注意されてきた。電話にしろ、手紙にしろやはり社会的距離に応じて言葉遣い

が異なるわけである。

しかし、現代の携帯電話やメール、ブログはこういった長年の慣習や礼儀のあり方に大きな変更を迫るようである。返事の内容よりも返事に時間がかかる方が失礼ということのようである。いわゆる「即レス」の反対で「亀レス」である。

相手との身体的、心理的、社会的、言語的な距離の取り方、振る舞い方というのは、国家や社会、地域によって異なるものである。技術とかスキルとかいうと表層的なもののように誤解する向きもあろうが、もっと深いものである。文化であると言い換えても良いだろう。携帯電話の使用による社会的距離の取り方の大きな変化は、大袈裟に言えば文化の変容を迫るものでもあるのだろう。

このような問題を考えるときに大いに参考になる理論として、原清治氏のいう「真夜中のラブレター理論」なる理論がある。原氏と私の共著書『学力論争とはなんだったのか』から引用する。

真夜中に好きな人への思いを手紙に書いて、朝読んでみると、とても恥ずかしくて渡せなくなるといった経験はありませんでしょうか。深夜という静かで誰にも邪魔されないひとりの世界の中で書いたラブレターには、それに込められた思いがとても大きくなるからです。これは私の勝手な造語ですが,「真夜中のラブレター理論」とでもいえばいいのでしょうか。自分の世界に入り込んでしまうと、周りがみえなくなって思いばかりが先行してしまうのです。

インターネットもそれと同じで、相手の顔を見てなら絶対いえないことが、相手の顔をみないですむだけに、その気持ちがどんどん大きくなってしまうのです。人間同士の会話では、その「行間」を読むことで、言葉だけでは伝わらない気持ちを、相手の表情やしぐさなどから読み取ることができます。少なくとも相手の顔をみていれば、行間を読みながらコミュニケーションが形成できるのです。とくに日本人は、その行間を読むことがとても好きな人種です。欧米では、「愛している」などといった自分の感情を、つねに相手に向けて言葉で表現します。それに対して日本人は、「俺の目をみろ、何もいうな」という独特の文化をもっているのです。それは、察することに重きを置いて、黙することを身上としたものであります。こうした文化はとても美しいのですが、それは、その人が目の前にいることが少なくとも前提となるのです。しかし、ネット社会では、両者の間に介在するのは言葉だけになってしまします。その意味で、日本人はネット社会にはもっとももろい人種であるといえるでしょう。

原氏のこの議論は非常にわかりやすく、本稿の趣旨に添うものでもある。即時的な反

応を見つめ直して冷静なものに練り直してから他者に発信するという文化が、携帯電話や電子メールの普及により、練り直さず、即時的な反応（内省によって練り直されないむき出しの反応）がそのまま相手に伝えられることになってしまう。それが往々にして不幸な結果を呼ぶことになるわけであろう。

つまり、即時的に反応するから、必要以上に攻撃的になり、喧嘩をあおり立てることになることも多くなるのだ。直接膝を詰めて目を交えて話し合えばうまくいったかもしれないコミュニケーションも、PC 上の文字だけで相手を判断し、攻撃的な言葉にはより攻撃的な言葉で返してしまう。原氏のラブレター理論とは逆で、送る前に恥ずかしいと思うのではなく、送ってから「しまった」と思うわけである。冷静になり、自分を見つめ直す時間がなく、次から次へと感情の赴くままにメールを送信して相手を攻撃してしまうのである。これは若者だけの問題ではない。大人も若者もお年寄りも共通の問題である。携帯電話ネイティブの世代は、この種の社会的距離の取り方、距離に応じたコミュニケーションのはかり方ができないと言っているわけではない。できる人もいることはまちがいない。しかし、社会の変化のゆえか、小道具の発達のゆえか、は別として、様々な社会調査の結果を見ると、他者とのコミュニケーションを苦手とする人の割合が高まっているようである。携帯電話によって疑似コミュニケーションは盛んになるだろうが、真のコミュニケーションはおざなりになるのかもしれない。そしてその真のコミュニケーションの能力こそが、現代社会において求められるもっとも重要な社会的能力の一つなのであろう。

【参考文献】

門倉貴史(2008)『セックス格差社会―「恋愛貧者」「結婚難民」はなぜ増えるのか―』宝島社

加納寛子(2008)『ネットジェネレーションのための情報リテラシー＆情報モラル―ネット犯罪・ネットいじめ・学校裏サイト―』大学教育出版

加納寛子(2009)『即レス症候群の子どもたち―ケータイ・ネット指導の進め方―』日本標準

渋井哲也(2008)『学校裏サイト―深化するネットいじめ―』晋遊舎

下田博次(2008)『学校裏サイト―ケータイ無法地帯から子どもを救う方法―』東洋経済新報社

原清治・山内乾史(2005)『学力論争とはなんだったのか』ミネルヴァ書房

安川雅史(2008)『「学校裏サイト」からわが子を守る！』中経出版

『児童心理』2009 年 9 月号(特集　子供のケンカ)金子書房